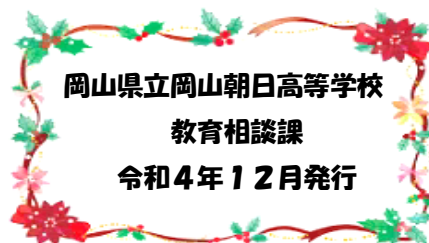


相談課 便

*第71号



即時近況報告

門間 紀子

つい最近まで、大学時代の友人とは毎年2回程度会って遊ぶ、クリスマスカードや年賀状のやりとりのみ、海外在住の友人とは数年に1回会うだけ、などそれぞれ別の友人と違った方法・頻度で交流をしていた。そのいずれも1年単位での近況報告で、内容も大まかなもので、「元気そうで良かった」「また会えたらいっぱい話そうね」と言ってお互いの健康を祈りつつ、またの再会を楽しみに日常に戻る、という特別な時間だった。

その友人の1人が看護師を経て大学院生になり、偶然大学時代に教わっていた教授と出会い、その方がオートエスノグラフィーという自分の過去の経験を書き起こし、それを調査・研究することに取り組んでいて、教え子である私たちの情報がほしいという依頼があったため、トークグループを作成した。私もそのグループの一員になり、スマートフォンで連絡を取ることができる気軽さから、非日常の大まかな近況報告が、日常の詳細な近況報告に変わってしまった。

反抗期の息子と日々戦いながらベトナム語も学び研究に勤しむ学生、子どもに英語を教える仕事と子育てに奮闘中のママ、アメリカで歯科衛生士をしているママ、そして私、と大学時代に一緒にスペイン語を学んでいたクラスメイトが集結して、毎日何かしらのやりとりをしている。シアトルとは時差があるので、すぐには返信できない時間に投稿されるが、みんな大人なので、既読スルーで怒ることもしない。かわいい子どもの写真で癒やされたり、私も負けじと癒やしのアイドルの画像を載せて見事にスルーされたりしている。日々忙しくて、心がささくれ立ってしまうこともあるけれど、それもみんな同じで精一杯生きていることが即時に分かり、勇気づけられて、頑張る力をもらえている。きっと高校生も同じだろうな、と最近思うようになった。でも、スマホの使い過ぎにはお互い注意しましょうね！



編む心

信宮 優子

この冬、二年生が家庭科の授業で指編みのアクリルたわしを作成したそう。今はきっと年末の大掃除中。二年生の皆さん、色鮮やかな小さな編み物を活躍させているかな？

幼いころの私と姉のセーターはいつも母のお手製であった。小さくなったら、丁寧にほどいて湯で洗って干して、かせにして編みなおし、新しいセーターになった。サイズアップで毛糸が足りなければ、ベストになったり、配色よく他の色の毛糸が足されて違う顔のセーターになったりした。ほんの少しだけ残った毛糸は順番に編み足され、カラフルなこたつ掛けになっていった。こたつにかかったままで編み進めていく母の姿は愉快だったし、姉と「これはあのセーターの糸よな」と話すのも楽しかった。

振り返れば、足ふみミシンを踏んで内職をしていた母は、質素儉約に努める「昭和の母」であった。いわゆる自尊心を高めるような誉め言葉をかけてもらった覚えはないが、言葉少なに日々の瑣事を大切にしていたその姿を見て、学んだことも多かったのだと思う。コミュニケーション重視の現代社会では言葉は大変重要なアイテムで、上手に丁寧に使うことが求められるし、そうしなければならぬと学校でも重ねて強調している。その正しさの一方で、言葉では伝わらないことを伝えてくれるもの達の価値が、今さらながら思い起こされ心にしみわたった、そんな今年の12月だった。

くだんのこたつ掛けだが、数々の転居を経て、実はまだ我が家で健在だ。数年前処分しかけたが、思い直してクリーニングに出したところ、「昔はこんなのがたくさんあったよね。思いが見えるよね。」と店の奥さんに言われて、ちょっぴり目が潤んだ。時代も進み、こたつを出さない我が家の押入れで、数少ない出番を待っている…と思う。

生徒の皆さんのお宅にも「こたつ掛け」、きっとあると思う。3月に家を出る三年生、見つけてから旅立ってほしい。

高台のススメ

内田 康晴



コロナで外出のしにくい期間が続きましたが、ふと思いついて自宅から徒歩4～50分ほどのところにある山に登ってみました。倉敷市の東部にある日差山という山ですが、山といっても標高170メートルほどの高台であって東京スカイツリーの三分の一にも満たない高さです。こどもの頃遠足などで何回か登ったものの、最近は長く登っていませんでした。

天気の良い日曜日の午後家を出て、のんびりとウォーキング。運動不足の体のみならず心までほぐされる思いで、気持ちよい汗をかきながら頂上の寺に到着しました。そして、こどもの頃の記憶を辿って道を見つけ、裏手にある大きな岩の上に登りました。

絶景でした。岡山平野が広く展望できます。児島湾と金甲山、その向こうに遙か小豆島とおぼしき一段霞んだ山まで見渡せます。さらに、北は吉備高原の山々まで。

目を懲らせば、道路を車が走り、視野に広がる下界では、確かに今も日常が進行しているのですが、どこか現実感が無く別世界の感覚です。さほど長時間歩いてもいないのに、自宅さえ遙か彼方に見えます。

不思議に心地よく、岩の上に座り込んで広角に広がる景色をしばらく楽しむことにしました。周辺には鬼ノ城や吉備路古墳群それに楯突き遺跡などの遺跡が散在しています。これだけ見晴らしがきくこの場所は、古代においてきわめて重要な地点であったに違いありません。当時の人は、どんな思いでこの景色を眺めていたのだろうと想像を膨らませました。また、自分自身の通った学校や過去に勤めた職場(高校)もそこここに点在し、目をとめるたびに、その時々思い出と、ほろ苦いような懐かしさが湧き上がります。

そうこうしているうちに、いつの間にか1時間以上が経過し、岡山平野を渡ってくる風にすっかり体が冷えてしまいました。そそくさと立ち上がって、体を温めるためにやや早足で下った帰り道は、ほんの30分ほどでした。

トータル3時間足らずでしたが、とても良い旅行ができた気分です、すっかりリフレッシュできました。

天気の良い日の近所の高台へのウォーキング。オススメです。

簡単だけど大切なこと

柴田 みさえ

相手にどんな声掛けをするかは意外と難しい。表情はもちろん、声の大きさ、トーン、行動のスピード、さらには普段の行動との違いなど、声掛けをする前に考えるべきことが多い。自分の発する言葉が、自分の思いをうまく伝えていないことだってある。どう言おうか考えすぎて、結局何も言えなかったり、言った後で後悔することも少なくない。自分の子供に対しての声掛けとなれば、なおさらである。しかし、ちょっとしたヒントをあるテーマパークで見つけたように思う。遊びに行く機会がない息子のご機嫌をとるために思い切って行くことにしたが、少しでも安くチケットを手に入れる方法の一つとしてバースデーチケットというものを購入した。誕生日の前後一か月ほどが対象となる優秀なチケットである。チケットを受け取る時に、「おめでとうございます」の言葉とともに、ワッペンのようなシールを渡されて、「よろしければ、ぜひお洋服の見えるところに貼ってください。」と言われた。自分自身は誕生日がうれしい歳でもないのに、ほぼ一か月後に誕生日がくる息子に渡した。「え、これ貼るの?」と、あまり乗り気ではなかったが、ちょっと見えづらいところに貼って歩き始めた。すぐにパークのスタッフが目ざとくそのシールを見つけて、声をかけてくれた。「お誕生日ですね!おめでとうございます。今日一日楽しんでくださいね。」わざわざ立ち止まり、笑顔で、拍手までしてくれる。息子は「今日が誕生日じゃないけどなあ」とボソッとつぶやきながら、照れ臭そうであった。が、まんざらでもないようだった。そこから一日中、会うスタッフのどの人からも同じように笑顔と拍手付きの「おめでとう」をもらった。見えづらいところにあったはずのお誕生日シールはいつの間にか、よく見えるところに移動したのを私は見逃さなかった。たくさんの「おめでとう」の言葉は息子に向けられたものだったが、その様子を見ているだけでなんだか私も幸せな気持ちになった。笑顔で話しかけること、それをもたくさん話しかけることが、やわらかい布をかけるように、心を包んでくれるのだろう。温かい言葉で包まれた心は、そうでない心より少し強いに違いない。心に余裕をもって、笑顔で声掛けをすればいいのだ、となんだかほっとした。